

## カントの第一，第二アンチノミー

### Kants erste und zweite Antinomie

細 谷 章 夫

#### 一

カントの第一批判における弁証論の中のアンチノミー Antinomie (二律背反) は、次の二点において重要な意味をもつように思われる。一つはこのアンチノミーの解決のために、現象と物自体とを区分したことであり、それはカント哲学の1つの基本的な考え方になったと云える。第二は、統制的原理がこのアンチノミーの解決において具体的に現われていることである。統制的原理が本格的に中心的な原理として述べられるのは、判断力批判においてであると云うことが出来るかもしれないが、少なくともその基本的な考え方は、第一批判の付録 (S. 670)<sup>(1)</sup> において示され、その付録はいわばアンチノミーにおける統制的原理の概念の補足として書かれたものと解されるからである。本論は従って、第一及び第二アンチノミーの問題点を明確にしながら、カントの理性による統制的使用が、どのような仕方で行っているのか、云いかえれば、カントのアンチノミーの解決がどのような議論によるものかを明かにすることを目的とする。

#### 二

周知のように第一アンチノミーは世界が時間及び空間からみて、有限か無限かの議論が矛盾にまきこまれることを示したものであり、第二アンチノミーは、合成体は単純なものから成り立っているか、いないか、あるいは単純なものを認めるか、認めないかの問題であり、同様に矛盾に巻き込まれることを示したものである。カントのアンチノミーの解決は単純化して云えば、それぞれのアンチノミーの定立、反定立が真の矛盾であることに疑問をさしはさむことから始まる。例えば、誰れかが「ある物体はよく匂う (定立としよう) か、よく匂わない (反定立としよう) かのいずれかである」と主張するならば、第三の命題「ある物体は匂わない」が生ずるといふ (S. 531)。この場合定立と反定立とは真の矛盾 (矛盾対当 das kontradiktorische Gegenteil の関係にある) とは云えない。何故なら、この相互に相対立する命題 (定立と反定立) とがいず

れも偽となりうる場合がありうるからである。カントはこのように絶対的に矛盾とならない二つの対立する判断を、弁証論的対立 *die dialektische Entgegensetzung* (S. 532) と名づけた。もちろん「ある物体はよい匂いがするか、あるいはよい匂いのするものでないかのいずれかである」とするならば、それは矛盾対当であり、第三の命題は存在しない。第三命題「ある物体は匂わない」は「よい匂いのするものではない」の反定立のうちに含まれるからである。これを「世界」の概念の問題にあてはめると、「世界は空間及び時間からみて無限であるか無限であるのではないのかのいずれかである」は矛盾対当の関係にある。従って定立と反定立のうちに第三の命題は入り込まず、一方の真は他方の偽を意味する。それに対して「世界は無限か有限かのいずれかである」とする場合弁証論的対立の関係にあり、定立、反定立のいずれの命題も偽であることがありうるというのがカントの主張なのである。それでは一体、世界は空間、時間からみて、無限であるか有限であるかのいずれもが偽である場合とはどういう場合であるのか。また世界は無限か、無限であるのではないというときにも、世界は無限であるとする定立が偽とされても、それは決して世界の有限性を定立しているわけではなく、ただ世界が無限であることが廃棄されたことを意味するだけである (S. 531) とするとき、それは一体何を意味するのであろうか。

私たちはまず、カントが宇宙論的理念における四つのアンチノミーをどのように導き出したかを思い出す必要があるようである。カントはそれらをカテゴリーより導出したが、すべてのカテゴリーからではなく、系列を形成するカテゴリーからのみ導き出したのであった (S. 436)。より具体的に云えば、第一は量のカテゴリーより、私たちの直観の二つの根本的な量としての時間、空間であり、それは時間、空間における現象の絶対的総体性をめざして一つの系列を形成する (S. 438ff)。第二は質のカテゴリーで、物質の実在性の内部的性質にかかわり、現象において与えられた、ある全体を分割することによって絶対的総体性をめざす一つの系列をつくり (S. 439ff) 第三は関係のカテゴリーのうち因果性のカテゴリーが、結果に対する諸原因の系列として、現象一般の発生によって絶対的総体性をめざす系列をなす (S. 441ff)。そして第四は様態のカテゴリーから、現存する偶然的なものが依存することにより生ずる、絶対的総体性をめざす依存性の系列が形成された (S. 442/3) のであった。実はこの系列を形成するカテゴリーだけがアンチノミーをつくること、系列の全体とその系列の項との関係がアンチノミーの本質にかかわるとカントはみているのである。すなわち「純粹理性によるすべてのアンチノミーは弁証論的論拠に基づいている」 (S. 525) というのであるが、その弁証論的論拠 *das dialektische Argument* とは、系列の全体とその項に関して1つの誤った理性推理が行われているということなのである。その論拠を分析すると、 $\alpha$  条件づけられたものを与えられているなら、そのもののあらゆる条件の全系列も与えられている。 $\beta$  ところで感官の諸対象は私たちに条件づけられたものとして与えられている。 $\gamma$  故

にあらゆる条件の全系列は与えられている、ということになる。

問題はこの $\alpha$ の大前提であって、そこではこれらの諸系列の絶対的総体性 *die absolute Totalität dieser Reihen* が要請されているという。その結果、宇宙論の諸理念が理性を矛盾へとおとしこんでいることになる。カントに云わせると、この大前提は決して正しいものではなく、私たちにとって疑いもなく確実に云えることは「……条件づけられたものが与えられているならば、まさにそのことによって条件づけられたものに対して、あらゆる条件の系列において一つの背進が私たちに課せられている *aufgegeben sein*」(S. 526) という命題なのである。「……私たちに課せられている」とは理性による一つの論理的要請として、その背進を継続するように要求されているとの意味であって、決してあらゆる条件の全系列が現実にと与えられているということではない。そして理性による一つの論理的要請として、系列における背進が行われるということがまた一つのポイントなのである。何故なら、これこそ統制的原理 *regulatives Prinzip* の働きであり、それは理性の原理であって、諸現象の諸条件の系列を背進しつづけることを命じる、一つの規則 *eine Regel* なのである。その限りにおいて統制的原理は、客観における総体性 *die Totalität* を現実的なものとする公理 *Axiom* ではなく (S. 536)、もし客観（諸現象）において、それ自体が与えられたものとする、その原理は構成的な宇宙論的原理 *ein konstitutives kosmologisches Prinzip* となる。それに対してこの統制的原理の本質——たんなる規則である限りにおいて、規則としてのみ役立つ原理には決して客観的実在性 *objektive Realität* を付与してはならないというこの原理の本質——は従って次のことを意味する。この原理は客観が何であるかということを示すことは出来ず、ただ客観の完全な概念に到達するために、どのような経験的背進が行われるべきかを云うことが出来るだけのものである (S. 538) というのである。

ではこの経験的背進がどのように行われるのか、そもそも経験的背進とは何か、私たちはそれを追求する必要がある。それにはまず、経験的背進がどのように行われるかの問題において、重要な役割をする「無限への背進」と「不定への背進」の概念をカントの説明 (S. 538ff) に従ってより明確にしておこう。

### 三

カントはこの二つの背進の仕方を区別する。数学者のもちいる無限への前進 *progressus in infinitum* と哲学者が用いる不定への前進 *progressus in indefinitum* としている区分がそれである。ここで今、前進 *progressus* か背進 *regressus* かは全く問題になっていない。何故ならあるものを始点にして、どの方向を前進とするかあるいは背進とするかは全く定義の問題であって、こ

ここで問題ではなく、前進にしろ、背進にしろどのような仕方の前進かあるいは背進であるのかだけを問題にしているからである。すなわち *in infinitum* か *in indefinitum* かだけが問題になっている。カントは次の直線の延長を例としてあげたので、ここでは *progressus* と云っただけである。さて、その直線の延長の場合、無限に *in infinitum* と云うより不定に *in indefinitum* といったほうがより正確であるという。というのは、「不定に」は人が欲するだけ直線を延長することを意味するが「無限に」はその直線の延長を決してやめてはいけないことを主張しているからであるという。すなわち「不定に」はどこまで延長するかに関し、全く任意であるのに対し、「無限に」は、無限以外のいずれの量よりも大きい量を示しているものである以上、決して止まることのない量であるはずであるが、現実には直線を無限にひくことは出来ず、ある点で止めているのだから、直線を延長する場合、数学者が云う「無限に」よりも「不定に」のほうがより正確であると言う意味である。けれども直線を延長することが出来るかどうかという可能性が問題になっているとき、「無限に」という表現も正しいという (S. 539)。このことは当然条件から条件づけられたものへの進行 *der Fortgang von der Bedingung zum Bedingten* (S. 539) (これは前進も背進も含む表現と解せられる) の場合にもあてはまる。条件から条件づけられたものへの進行が出来るかどうかという進行の可能性が問題になっているときには、*in infinitum* も *in indefinitum* も、どちらもその可能性を示しているので問題はなく、従って両者になんの区別もない。ところが背進がどこまで広がるかといった場合には事情は全く異なる (S. 540)。すなわち背進をおしすすめる範囲、あるいは領域が問われるときには、無限への逆行 *ein Rückgang ins Unendliche* と不定に広がった逆行 *ein unbestimmbar weit (in indefinitum) sich erstreckender Rückgang* でははっきり区別されなければならないからである。前者は無限の背進によって、無限の系列の範囲が与えられ、後者は背進しただけの系列が一時的に与えられているだけで、背進の系列は完結したものとして規定的には与えられていない。従って無限背進と不定背進とは全体量 (系列の範囲) が規定的に与えられているかどうかによってその差異が生じる。無限背進はどの量よりも大きい「無限」という一つの規定的な量を表わしているからである。これはとりわけ分割問題をとりあつかう第二アンチノミーにかかわるが、全体量が与えられていながら、系列がその内的条件へとどこまでも進む場合も一つの無限への背進なのである。それに対してある系列のうちの一つの項だけが与えられていて、その項から絶対的総体性へと進む背進は不定への背進なのである。この場合、背進によって得られる全体量が、常にすでに行われた背進と関連して、不定に与えられているからである。全体量が与えられていて、どこまでも続く背進と、背進によってはじめて全体量が与えられるような不定への背進との区別は、果してほんとうに重要な意味をもつのであろうか。それに対する答えとして、カントのこの考え方をのちの論究のために次のように敷衍し、かつ、その重要性をあらか

じめ述べておこう。それはこの不定への背進が結局のところ、不定な領域の存在することを意味し、世界全体という宇宙論的理念は本質的に不定量であるところの全体であるということ、そしてそのことによってアンチノミーも避けられるということなのである。

#### 四

私たちを第一アンチノミーへと導いたもっとも問題ある概念、「世界全体 ein Weltganze」を私たちはどこから得てきているのであろうか。カントはそれに対して、それは諸現象の合成による総体性 die Totalität der Zusammensetzung der Erscheinungen から得てきているとする。もっと正確に云えば、「可能的な経験的な背進 ein möglicher empirischer Regressus」以外のなにものでもない (S. 546) のである。可能的な経験的な背進とは、時間の系列であるあらゆる過去の世界状態の系列と、空間の系列である世界空間において同時に存在する諸物の系列。——この二つの系列から成る現象の系列のことである。そしてこの現象の系列がすでに予備的概念として述べておいた不定への背進であること、及び世界全体 ein Weltganz が概念であって、決して直観でないことを指摘 (S. 547) するのである。この不定への背進と世界全体が直観でなく概念であるという、二つの結論は密接に結びついている。というのは世界全体が不定への背進によるものであるということが、同時に世界全体は直観ではなく、概念であることの論拠になっているからである。

「世界全体」が現象の系列である限り、且つ、その現象が時間と空間の系列によって成り立っている限り、そしてカントによると時間、空間は概念ではなく、直観である限り、その現象の系列から成り立つ世界全体は概念ではなくて、直観ではないかとの疑問は当然起こりうる。それにも拘らずカントは「ところで私は世界全体をつねに概念においてのみもっているのであって、(全体として) 決して直観のうちにもっているのではない」 (S. 546/7) といいきる。それはどう云う意味であるのだろうか。要約するとその理由はこうである (S. 547/8)。もし私が直観のうちに世界全体をとらえることが出来るとしたならば、それは世界全体を規定的にとらえたことになる。ところがカントの主張によると、私たちはまず世界全体の量が与えられて、そこから背進の量が規定されるのではなく、かえって世界全体の量は経験的背進によってはじめて与えられるものであるというのである。しかもその背進は決して規定的な背進ではなく、諸条件の系列のあらゆる項からさらに高い項へと不定に進む背進であって、従って諸条件の全体の量からなる（時間、空間の系列、それも不定な背進による系列という諸条件からなる）世界全体は、決して規定されていない全体量なのである。だから、その世界量が不定量を含む限りにおいて、それは統制的原理の働きの結果でもあるのだから、全体を規定的にとらえる直観ではなく、概念とみられなければならない

ないというのが、その根拠なのである。

カントがまた世界全体の概念が「無限に進む背進」とは云えないというとき (S. 547) も同じ論点による。無限への背進はやはり背進を止めることのない一つの規定された背進だからであり、「無限」はそのとき背進がまだ到達していない諸項を先き取りしている *antizipieren* ことになる。世界量がすでに規定的に与えられている場合は別として、世界量は背進に先立って規定されるべきではなく、あくまでも背進によってはじめて与えられるというのが、その基本的な考え方である。というのは背進によって世界全体という概念をつくりあげるのものであって、世界全体という概念が背進を行わせるのではないからである。従って背進と世界全体という世界量との関係はカントが自身が〔注〕(S. 546) で示しているように、同じ大きさをなしている。世界系列 *eine Weltreihe* は可能的な経験的背進よりも大きくもなければ、小さくもないのである。まさに可能的な経験的背進の大きさが世界量なのである。ところがこの背進が不定であるが故に世界量も不定なものとして与えられているというのがカントの主張なのである。そしてこの不定量としての世界量が結局、世界は有限とも無限ともすることが出来ないという結論へと導いていくことになるのであるが、その前にこの不定への背進及びそこに働く統制的原理の本質をさらに詳しくみてみよう。

統制的原理が客観におけるなんらかの総体性を現実的なものとする原理ではないこと、従ってその原理によって構成的原理のように客観的実在性を付与してはならないことはすでに指摘しておいた。というのは、それは単なる理性による規則に外ならないというのがその理由であった。だからこの原理は客観が何であるかということは関してはなんら機能せず、ただ客観の完全な概念に到達するために、どのような経験的背進を行うべきかという、その規則を指示するだけのものであった。とするならば、客観的実在性を付与してはならない単なる規則としての統制的原理とはさらにどのような性質をもつものであろうか。すなわちその原理によって何が到達されるのか。またどのような根拠によってそのような規則が主張されるのであろうか。

カントは理性の統制的原理の根拠 *der Grund des reguleativen Prinzips der Vernunft* (S. 545) を示している。私たちが世界全体の概念をかくとくするため、経験的背進を行うとき、それによって絶対的限界に関する経験を私たちは決してもつことがないこと、また端的に無条件であるようなそのような条件に関する経験をもたないことが統制的原理が機能する根拠になっている。逆に言えば経験には、せいぜい相対的限界、あるいは条件づけられたものとしての条件しか与えられていないということでもある。カントは次のように表現する。「しかしこのことについての根拠は、このような経験は継続された背進がある知覚によってつきあたりうる無や空虚によって、諸現象の限界を自分のうちに含まなければならないが、しかしこのことは不可能である、というこ

とにある」(S. 545)。ところで絶対的限界 *eine absolute Grenze* や無条件的な条件に私たちの経験は決して到達することがないということ、あるいはこのような限界や無条件的なものを経験は教えるものではないと云うことは何を意味するのだろうか。これは次のように解釈しうると思う。私たちの経験的背進が規定的な世界全体の概念をつくり上げようとして、どんなに継続されようとも、決して到達することは出来ず、従って私たちの経験的背進は不定のままにあり、それに伴い世界全体の概念も不定領域を含むままに終る。だから私たちは規定的な世界全体の概念をもつことはないのである。ということは、要約すれば、私たちがあたかも世界全体という絶対的総体性としての客観的概念に到達するかのように思うのは、理性の誤った推理に依存するものであるということである。それはほんとうは単なる規則である統制的原理によるものである限り、世界全体は一つの理念でしかなく、それを客観的に実在するかのように思い込むところに誤りがあるということである。従って経験的背進が不定量を含むということ、それはとりもなおさず経験的背進によってのみ、また経験的背進の量より大きくも小さくもなく、世界全体の概念が形成される限り、その概念も不定領域を含み、そのことは世界を規定的に考えるあらゆる概念（例えば有限であるとか無限とか——これらはいずれも背進に先き立つて世界全体を規定している）を拒否することにつながっていく。云い換えれば世界全体は不定量を含むが故に、有限でもなく無限でもないのである。

この経験的背進は絶対的限界に到達することがないにも拘ず、具体的にはある系列の項からさらに高い項へと逆のぼり、そのより高い項への上昇が経験によって知られようが知られまいがに拘ず、より上昇系列の項を求めつづけるもの(S. 546)なのである。これこそまさしく第一アンチノミーにおいて働く統制的原理であり、これは当然客観的実在性を付与しうるものではなく、それはあたかも絶対的限界に到達するかのように機能するが、実はそれは理性の働きによる単なる規則でしかないのであるから、決して客観的な絶対的限界に到達することがないわけである。世界全体という現象の合成による総体性という理念は、それがほんとうは経験的背進とそれをさらに継続しつづける統制的原理によって形成されたものなのだから、それによって客観が何であることを云うことは出来ないものである。従ってその理念はなにも現実的に客観的な実在性をもつものではない。第一のアンチノミーはそれを客観的実在性をもつかのように考え、世界全体の概念が背進によって完全に到達されたかのように考えるところに誤りがあるということになる。

カントはさらにこの間の事情を物自体と現象の区別によって説明しようとする。私が経験的背進によっては絶対的限界や無条件的なものに到達しえないということは、それが経験を越えているからと解すべきであるとしたのは、実はカントの物自体と現象の区別によってアンチノミーを避けようとしたことを踏えての解釈なのである。それではこのアンチノミーの箇所において、カ

ントは物自体及び現象ということによって何を云おうとしたのであろうか。この区別はまたカント哲学を貫ぬく考え方であり、その区別をする必要がまさしくこのアンチノミーにあったことを思うとき、私たちはこの二つの概念に言及しないわけにはいかないのである。

## 五

カントは系列に関して条件づけられたものと条件とが「物自体」の場合と「現象」である場合とを区別する (S. 526)。それによると自物体の場合には条件づけられたものもその条件も、第一項が与えられているならば背進は第二項にも課せられているばかりでなく与えられていること、そしてこのことは系列のすべての諸項にあてはまること、だから諸条件の完全な系列 *die vollständige Reihe der Bedingungen* が同時に与えられていることであり、あるいは前提されていることである。従ってこの場合、諸条件の系列の絶対的総体性を推理することは可能であり、世界全体という規定的な絶対的総体性の概念を獲得することが出来る。それに対して後者の現象の場合は、そのことは不可能であって、世界全体という概念は一つの経験的綜合 *eine empirische Synthesis* (S. 527) においてのみ与えられるのである。それは空間及び時間系列に基づく現象の経験的背進によってであり、しかもすでに述べたようにそれが不定への背進である限りにおいて、規定的な絶対的総体性の概念に到達することはないのである。この現象の場合はなにか現実的な人間認識の基本的あり方を示しているとも解されうるし、それに対して物自体の立場はかえって、理論的に規定された立場であるように思える。物自体において、条件づけられたものと条件との結びつきには、どんな時間的秩序も見い出されない (S. 528) というときに、まさしくそのことが端的に、示されている。どんな時間的秩序も見い出されないということを、カントは諸条件の完全な系列が同時に与えられている、あるいは前提されていると表現している (S. 428) が、ひとしたらこれは十分に正確な表現でないかもしれないのである。というのは「同時に」は時間秩序における一点を表わし、それは時間秩序を前提しての表現とも理解されるからである。この規定された物自体とある意味で現実的な現象の二つの側面を認識論的に敷衍していくとき、それは超越論的観念論 *der transzendente Idealism* (S. 519) の理論となる。カントによる定義に従って (S. 518ff) 要約するならば、こうである。まず第一にカントの立場である超越論的観念論は、通常の観念論とは異なる。何故なら通常の観念論は外的な諸物それ自体の現存を疑ったり、拒んだりするからである。その点超越論的観念論は外的な諸物それ自身の存在を決して疑うことがないのである。しかしその外的な諸物がそれ自体現象するとおりに実在するということには反対する。その点において実在論者は現われたものそれ自体を、真に存在するものにしてしまい、従ってカン



トに云わせれば、たんなる表象を事象それ自体とする。それに対して超越論的観念論は、理論的に（あるいは認識論的に）現象はなんらかの感性的変様を受けたのちの結果と考えるべきだとするのである。そしてその変様とは時間、空間という直観による変様を考えている。逆に云えば私たちに与えられている諸対象を認識論的に考えていく場合、諸対象を構成していく諸要素を除いていって、そこに理論的に想定されうる物自体を考慮すべきであるというのが超越論的観念論の主旨である。それがまた超越論的 *transzendental* の意味でもある。カントが現象を一つの系列として考え、絶対的全体 *ein absolutes Ganze* というものを考え、そしてその絶対的全体が可能的経験の限界を越えているとすると、そしてまた「越えている」と云うことによってアンチノミーの解決を意図するときも (S. 524/5)<sup>(2)</sup>、同じ議論なのである。すなわち超越論的感性論が、現象としての諸対象の背後に、非感性的原因 *die nichtsinnliche Ursache* (S. 522) としての物自体を考えたのと同様に、可能的経験を越えたところに物自体を考え、そこにおいては絶対的な総体性としての規定的な世界全体の概念が与えられるのである。それに対して可能的経験においては、背進によって不定量の世界全体しか与えられない。このときの可能的経験とは、人間のすべての経験を直接、間接をとわず含むことを意味する。従って過去の経験も、いまだ人において経験されないが将来経験される可能性をもっと思われるものも、例えば月に人が住むかどうか (S. 521) も可能的経験に入る。だからあらゆる時間及び空間において、すべての存在する感官による諸対象を表象し、且つそれをある完全性において考えたとき、それは可能的経験 (S. 523/4) と云える。可能的経験はその意味で理論的に規定された、一つの領域であり、現実にはまだ与えられていない諸対象との関係は、それら諸対象が経験に先立って存在するというとき、それはただ、経験の進行につれて、経験のその部分において見い出されるということの意味するだけのものなのである。だから「この進行の経験的な諸条件の原因は、従ってどの項において、あるいはまた、どこまでいったら背進においてその項に出会うことが出来るのかは、全く超越論的であって、それだから私にとって、必然的に未知である」(S. 524) のである。それに対して物自体は、可能性経験との関連なしで与えられているとする (S. 524) のは、それが可能的経験を越えて存在することを意味しているからなのである。すなわち規定的な「世界全体」という概念は、可能的経験の領域内には存在せず、それを越えた物自体のうちに存在するという二重構造になっているのである。そして二重構造になっているがゆえに、私たちの経験的背進をどこまでも押し進めても、それは可能的経験内にとどまり、物自体の領域に入ることはない。従って絶対的総体性としての規定的な「世界全体」はけして到達されることのない概念なのである。逆に云えば、絶対的総体性としての世界全体はたんなる理念でしかないことがこの現象と物自体の区別によって示され、それを端的に表わすものが不定量を含む経験的背進にほかならないのである。

## 六

以上の観点に立って、私たちはいよいよカントの第一のアンチノミーの解決の結論を述べるときが来たようである。カントは世界量に関する宇宙論的問題に対して、二つの仕方で解答する。一つは「第一で消極的な答え」*die erste und negative Antwort* (S. 548) であり、二つ目は「肯定的答え」*die bejahende Antwort* (S. 549) である。前者の答えにおいてカントは「世界は時間に関して第一の始まりをもたず、空間に関してもっとも外側の限界をもたない」(S. 548) と結論する。もし解答が反対された場合には、世界はなんらかの限界をもたなければならず、一方は空虚な時間、他方は空虚な空間によって限界づけられなければならない。しかもその世界限界は可能的経験において与えられなければならない。ところでこうした経験は私たちには決して与えられていない。そして絶対的な世界限界 *eine absolute Weltganze* は経験的には全く不可能であるという理由から、最初の結論が支持される。この証明について、カントは〔注〕(S. 549) で次のように指摘する。ここでの証明は第一のアンチノミーの反定立、「世界はどんな始まりをもたず、空間においてどんな限界をもたない、かえって、時間に関して空間に関して無限である」(S. 455) とは違った仕方でなされているという。第一のアンチノミーの反定立は、いわば独断的証明であって、そこでは物自体が考えられているため、すべての背進に先立って、その総体性からみて、与えられた或る物とみなされていること、そして空間、時間に関する有限を否定することから、ただちに空間、時間に関する世界の無限性が推論されているとする。確かにそのとおりで、それに対して「第一の消極的な答え」での証明では、空間的時間に世界が限界をもつとすると、経験的な背進はなんらかの絶対的限界に到達しなければならないことになる。ところで経験的背進は絶対的限界に到達するものではないのだから、このことは不可能。従って世界は空間的にも時間的にも限界をもたないと云える、が結論されるのである。但しこのことは直ちに「世界は空間に関して時間に関して無限である」と推論するものではない。主張しうることは、経験的背進が世界概念を作っているのであるから、その経験的背進に従うならば、時間的にも、空間的にも絶対的限界はないと云うこと、だから時間に関しては第一の始まりをもたず、空間に関してはもっとも外側の限界をもたないというだけなのである。カントが「消極的な」答えという理由でもある。しかしここでの証明に於いてもっとも重要なことは、「経験的背進が世界概念をかたちづくっている」ということをどこまでも基礎として証明が行われていることなのである。

第二の「肯定的答え」は「世界諸現象の系列における背進は、世界量を規定するものとして不定に進行する *in indefinitum gehen*」(S. 549) である。これは感性界 *die Sinnwelt* が絶対的量 *eine absolute Größe* をもたないこと、そして経験的背進がおのれの規則をもっていて、その

規則とは、ある条件づけられたものとしての系列のあらゆる項から、常にさらに遠い項へと進行しつづけることを意味する。カントによると、できる限り経験的使用の拡張をやめてはならないとするこの規則の働きは、理性の本来的で唯一の仕事であるという。ところでこの理性の規則による背進は、不定への背進である。というのは感性界が絶対的量をもたず、世界現象の系列における背進は時間と空間の系列に基づく限り、当然それは絶対的量をもたないからである。このことからこの系列における背進は不定への背進となる。そしてさらにこのことから、すでに述べた結論、世界全体は時間的にも空間的にも無限でもなく、有限でもないこと、それはいずれも世界全体という世界概念を規定的と考えるのは誤りであると指摘したことからも、次の重要な結論が導き出されうる。それは世界をなにか統一ある「一つの全体」<sup>(3)</sup>と規定的に考えること自体が誤りであるということである。世界量は全く不定な経験的背進によってのみ与えられているからである。

## 七

第二のアンチノミーの定立は「世界において各々の合成された実体は単純な諸部分から成り立っている。そして、いたるところ単純なものか、あるいは単純なものから合成されているものしか存在しない」(S. 462)である。この場合合成された実体 *eine zusammengesetzte Substanz* (S. 462) とは、本来の複合体 *das eigentliche Kompositum* としてのある実体的全体 *ein substantielles Ganze*, すなわち偶然的な統一 *die zufällige Einheit* としての合成的実体を考えているのだと云う (S. 466)。端的な一つの例としてはもちろん物体が考えられ、事実カントも物体の分割の問題をとりあげはするが、それだけに終るものではないことはライプニッツの单子 *monas* に言及 (S. 468/9) していることから明かである。有機体についてはのちに述べるが、それも当然ある実体的全体の一つと解すべきである。しかし空間に関しては、これは本来、複合体というべきものではないことを指摘している (S. 466)。というのは空間の諸部分は全体において可能であって、複合体としての合成された実体のように、全体が部分によって可能となるのではないからであるという。

第二のアンチノミーの反定立は「世界においてどんな合成されたものも単純な諸部分から成り立つのではなく、そしていたるところ世界においてなんら単純なものは存在しない」(S. 463) である。この命題は一見理解しにくいだが、命題の前半は合成されたものが無限に分割されることを意味していると解せられる。後半も同様の見方ですすめることが出来るが、カントは次のように注釈(反定立の証明の中で (S. 463/5))している。「そしていたるところ世界においてなんら単純

なものは存在しない」は、この端的に単純なものの現存在 *das Dasein des schlechthin Einfachen* が内的にせよ、外的にせよ、どんな経験、どんな知覚によっても確証されないということ、そしてこの端的に単純なものとは、単なる理念 *eine bloß Idee* であること、従ってこの理念の客観的実在性は可能的経験においては確証されないということの意味する、としている (S. 463/5)。これは第二のアンチノミーの解決を、やや先取る仕方で述べられているカントの注釈であるが、とにかくこの第二命題の反定立の主張は、単純なものの存在することに反対し、すべてのものが無限に分割可能であることを意味しているとしていいだろう。それに対して定立の命題の主張は、単純なものの存在を承認し、複合体は無限分割ではなく、有限の分割であることを意味する。従って第二のアンチノミーの基本的問題である「単純なもの」の存在を認めるかどうかの問題は、有限の分割か無限の分割かという、分割問題に帰着する。事実カントはこのアンチノミーの解決を分割問題それ自身に焦点をあてて論じている。それではカントの分割に関する考え方はどういうものであろうか。

まず分割において全体量が与えられているというのが、カントの基本的前提になっている。分割はその量の細分化であるのだから、すべての部分がどこまでも分割可能 *teilbar* であった場合には、与えられている全体とその部分の系列、すなわち条件づけられるものから条件へと進む背進は無限に進むということになる。そしてこの系列の絶対的総体性とは背進が単純な諸部分に到達したとき、はじめて与えられるということの意味する。ところで第二のアンチノミーの問題は次の点において第一のアンチノミーと異なる。条件(部分)が条件づけられたもの(全体)のうちに含まれていること、直観のうちに全体が与えられていることである。さきに内的条件へ無限に進行すると述べた(本文4ページ)のはまさにこのことを示している。第一のアンチノミーの場合には、諸部分の合成が全体をつくる限りにおいて、条件と条件づけられるものの系列は、並存的な系列を形成する。しかし量的に諸部分が全体のうちに与えられているとは云え、どれほどの諸部分が、ここではどれほどの分割があるかは与えられていないということである。言い換えれば、全体量として諸部分は直観のうちに与えられてはいるが、全分割 *die ganze Teilung* (S. 552) は与えられていないということである。ここで全分割とは、諸部分の数であり、また分割の数といってもよい。それが無限に分割することの出来る全体であるのなら、私たちは「その全体は無限に多くの諸部分から成り立っている」と云えそうな気がする。ところがカントはそれが云えないのだと主張する (S. 552)。というのは、全分割(分割のすべての数)は背進が行われることによってはじめて諸部分が現実的なものとして与えられること、この(無限分割の)背進は無限であったとしても、それは継起的無限 *sukzessivunendlich* であって、すべての項(諸部分)は無限からなるということとは別であるというのがその理由である。だから分割においては、その分

割をどこで中止するかは全く不定である。たとえ無限分割が考えられるとしても、現実的にはその項をさらに分割することが可能であると言うことを意味するにすぎない。ここに再び、第一のアンチノミーと同様、全分割に関しては不定への背進が生ずるわけである。但し、第二のアンチノミーにおいては、系列全体の量が不定であったのに対し、分割においては全体の量が直観に与えられている限り規定的ではあるが、分割の系列（諸部分の数）は不定ということになる。それだから、不定の全分割を含むことから、「分割の全系列が無限の集合として、まとまりある全体として与えられている」と云えないわけなのである。

では分割問題において、より具体的にカントは何を考えていたのであろうか。第二アンチノミーの解決としての分割においては、物体 *der Körper*, 空間, 有機体（あらゆる部分化された（有機化された）全体 *jedes gegliederte (organisierte) Ganze*）の三つである。空間は本来すでに述べたように、複合体ではないのであるから、分割問題において除外されているように思われる。ところがカントによると物体の分割可能性は、その本質において、空間の分割可能性にその根拠があるという (S. 553)。というのは、空間は拡がりをもつ全体として本来考えられており、直観形式として物体を可能にするものだからである。この「物体を可能にする *die Möglichkeit des Körpers ausmachen*」とは、物体の存立すること及び物体を拡がりあるものとして直観において表象することが出来るという意味である。だから「空間の分割」は、空間の一つの性質として超越論的感性論で言及されるべきものであったかもしれないが、この問題がアンチノミーにかかわるので、ここまでもちこされたと言うべきであらうか。物体の分割可能性が、空間の分割可能性に依存するということは、分割に関して両者は全く同じ分割の根拠に基づくことを意味する。

しかし両者は何において異なるのであろうか。その一つは物体は空間における実体として *als Substanz im Raum* (S. 553) 表現されなければならないということにある。それに対して空間の分解 *die Dekomposition* は、すべての合成 *alle Zusammensetzung* を除外することは出来ないのである。というのは、空間は合成ということ以外になんの自立的なものをもたないこと、諸部分の合成こそ空間の本質なのである (S. 553 u. 466)。これは感性論において、「……人が多くの諸空間について語るとき、それによって全く同一の、唯一の空間の諸部分だけを考えている *nur Teile eines und desselben alleinigen Raumes verstehen*」(S. 39) といい、また「空間は一つの無限に与えられた量として表象される」(S. 39) ということからも出て来る、感性論の一つの帰結でもある。も一つの区別は、空間が合成なしには全く考えられないのに対して、物体は物質のすべての合成 *alle Zusammensetzung* が廃棄されても、あとになにも残らないとは考えられないというところにある。というのは、物体は実体である限り、合成の主体がなくなっても合成をつくりあげている、諸要素が残存するからである。つまり合成されなくても、諸要素として残るなにも

のかがあるというのがその論拠なのである。もちろんこの場合、実体とは、カントも指摘しているように (S. 554/5), 絶対的実体ではなく、現象において実体と呼ばれているもの、感性の持続的な像 *beharrliches Bild der Sinnlichkeit* を意味する。

さて、以上のことから空間の分割についての結論として、一つのまとめをしておこう。空間分割の本質は分割の無限性 *die Unendlichkeit der Teilung* にあり、そのことによって分割可能性 *die Teilbarkeit* が与えられる (S. 554) ことになり、物体の分割可能性もそれに依存する。しかしその分割の無限性それ自体は、端的には不定 *unbestimmt* な諸部分の集合しか与えないということがまた重要な点であった。というのは分割の全体（分割の数、諸部分の数でもよい）は継続的な背進によってのみ与えられ、背進に先立っては決して与えられないからである。ここで第一のアンチノミーにおいては、規定的な全体を考えてはならなかったのと同様に、第二のアンチノミーでは、規定的な分割の全体を考えてはならず、従って系列においては、完結された系列 *voll-endende Reihe* を考えてはならないのである。そしてこの不定に進む背進に基づく分割の規定はやはり経験の問題ではなく、理性の原理 *ein Prinzipium der Vernunft* であるとして、すでに規則としての統制的原理が働いていることを示している。拡がりあるものの分解 *die Dekomposition* において、この現象の本性に従って経験的背進を決して端的に完結したものとはみなしてはならないとするこの規則を、カントは現象一般の超越論的分割 *die transzendente Teilung einer Erscheinung überhaupt* といっている (S. 555)。もちろん理性の原理である限り、客観的实在性をそれによって付与してはならないことは、第一アンチノミーの場合と同様である。

最後に「物体」や「空間」とは異なる分割の問題として、有機体——カントの表現に従うならば「あらゆる部分化された（有機化された）全体 *jedes gegliederte (organisierte) Ganze* (S. 554)」を少しばかりつけ加えておこう。（以下このやや長い表現をもちいずに「有機体」ということにする。）

有機体とは彼の定義によれば、それ自体与えられた全体において分離しているものであり、それは無限に部分化されているとは考えられないものなのである。すなわち有機体を分割するとその部分がさらに有機体からなりたっていて、そしてさらに分割され、その諸部分がまた有機体…というように無限に進行することはありえないとしている。何故なら部分化された物体においてどこまで部分化されるかは、有機体の場合には経験が決定すること (S. 555) だからであり、また決定することが出来るとしていることである。カントは「無限に部分化された有機的物体 *ein ins Unendliche gegliederte organische Körper* (S. 554)」というものを想定し、それが矛盾につきあたることを示して (S. 554/5) いる。カントのその主張の根拠を要約すれば、有機体というこの概念によって、全体はすでに分割されているものとして表現される。すでに無限に部分化された有

機物的物体とは分割のあらゆる背進に先立って、その全体のうちに見い出さなければならないことになる。ここにカントに云わせると矛盾がある。何故なら無限の背進は決して完結されることのない系列とみなされなくてはならないのに、まとまりあるものとして「無限に部分化された有機的物体」においては、その分割の全体が完結されたものとされているからである。もちろんこの議論においてはすでに、無限分割が分割の全体に関しては不定であるという、今までの結論を使用しての議論であることは注意しておいていい。ともかくここにカントの有機体に対する考え方が、はっきりと示されているといえる。有機体とは、全体とその諸部分とが相互にしっかり結びついていて、それは諸部分が全体を規定しているばかりではなく、全体も規定的に諸部分を決定しているものなのである。少なくともこの箇所において、カントの有機体の考え方は、なんら不定なものを含まないものを考えているのである。全体量としての不定であれ、諸部分の不定であれ、なんら不定なものを含まない。

〔注〕

- (1) Kritik der reinen Vernunft の第二版の頁数を示す（以下同様）。
- (2) この箇所を引用しておく。

「これとはちがった関連においてのみ、すなわち、これらの諸現象がまさに絶対的全体という宇宙論的理念として使用されるはずである場合には、そして、それだから、可能的経験の限界を越えてゆくということが問題となっている場合には、どのように感官による前述の諸対象の現実性をとらえるかという、その仕方における区別が重要である、それはある一つの人を欺く迷妄を予防するためであり、その迷妄は、私たちに固有の経験概念のとりちがえから、必然的に生じてくるに違いないのである」

- (3) 世界を「一つの全体」と考えることが、カントの就職論文、De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis における基本的な前提であった。今や、その前提が、ここにおいてくつがえされたことを意味する。詳しくは次の拙論を参照のこと。

「カントの就職論文における感覚的認識と悟性的認識」(p. 12～13)

(「哲学」(三田哲学会刊行)第54集)1969年11月

〔論文受理 1978. 9. 29〕